

||||||| 記 事 |||||

例会記録

日本医史学会 5月例会 平成27年5月23日(土)  
順天堂大学医学部センチュリータワー 3F北306号室

1. 水島府県別生命表における刊行経緯・方法の変遷と生命表精度に関する認識 逢見憲一
2. 浅田宗伯生誕200年 渡辺浩二

日本医史学会 6月例会 平成27年6月27日(土)  
順天堂大学医学部9号館4F第3会議室①

1. 日本近代コスメトロジー(化粧品学)と化粧品研究家藤波芙蓉 鈴木則子
2. コッホ碑の変遷についての考察 西巻明彦

例会抄録

## 東京医科歯科大学創立者 島峯徹による アイヌ人の口腔内調査について

——発見された90年前の研究誌  
「純粹『アイヌ』人の口腔器関特に歯牙の研究」——

鈴木浩一郎, 戸出 一郎

昭和3(1928)年に東京医科歯科大学を創設した島峯徹は、大正8年と9年の2回にわたり、東大医学部の後輩の金森虎男と伴に北海道へアイヌ人の口腔内調査をした。

またその調査結果を大正15年に出版したのが表記の研究誌である。そのほぼ同じ時期に、島峯の師匠格の小金井良精(東大解剖学教授)も「人類学研究」を同じ出版社から刊行しており、島峯の研究誌の書評もその中に挿入されている。

アイヌ人は当時既にかなり雑種化されており、人類学的見地を重要視する島峯が求める純粹アイヌ人を探す事からして困難な事であった。其の為、大正8年は現地の事情が良く分からず、準備不足もあって目的を達成出来なかった為、翌年の9年に再度文部省より国費を得、準備も万端にし

て調査をした。

その結果を略述すると、口腔衛生思想が全く無いにも拘わらず、純粹アイヌ人には虫歯が少なく、歯周病に到っては殆んど無きに等しい状態であった。中でも島峯達を驚かせたのは誠に健全な顎骨と歯列弓であった。上下顎とも第三大臼歯を含めて歯列が理想的に配列されており、当時日本人に多く見られた不正歯列は殆んど見当たらなかった。以前より生活環境を和人に強制的に圧迫され、肉食中心だった食生活も大幅に変化していたにも拘わらず、顎顔面領域の形態は昔の姿を変えていない。それに比べ、内地の和人は口腔衛生思想を多少なりとも身につけているにも拘わらず、歯列不正が甚だしい。虫歯や歯周病も多発している。

これは如何なる原因でこうなったのであろう

か。島峯は「この原因は蓋し食料、飲料、或いは彼らの生活状態、或いは人種関係かの何れか、又はこれ等の総合に由るべきもの有るべしと雖も、吾人の調査研究による上記各項の事項より結論するに、第一に顎骨の発達著しく良好なる点に重きを措かんとす。然れども此の原因の追究は実に至難、且つ斯学にとりて頗る重要な問題にして大いに興味の存する所、向後諸方面より研究を俟たんと欲す。」と結語している。

以下、島峰徹の略歴を記す

- 明治10(1877)年 新潟県三島郡片貝村に生まれる。
- 明治34(1901)年 金沢の第四高等学校卒業。
- 明治38(1905)年 東京帝国大学医学部卒業。
- 明治40(1907)年 独逸ベルリン大学歯学科入学。
- 明治42(1909)年 ブレスラウ大学にて第二セメント質を発見。  
顎骨の人類学的研究をし、クラーク解剖学教授と共著を公表。  
唾液の研究をし、レウマン生化学教授と共著し、公表す。
- 明治44(1911)年 ブレスラウ大学にて梅毒菌の分離・純粋培養に成功し、これを公表する。
- 明治45(1912)年 ベルリン大学歯科医学科主任となる。
- 大正2(1913)年 ベルリン大学より1年留学延長を懇願される。
- 大正3(1914)年 先進諸国の歯科教育事情を視察し、第一次世界大戦を契機として12月に帰国する。
- 昭和3(1928)年 東京高等歯科医学校設立する。
- 昭和11(1936)年 独逸よりローテルクロイツ勲一等を授与される。  
その他各国から学位、名誉会員等多数を授けられる。
- 昭和19(1944)年 2月10日、敗戦の報を聞かずに逝去する。

島峯がブレスラウ大学にて発見した第二象牙質は、当時歯牙そのものにしか関心を持たなかった世界の歯科界に、歯周組織に眼を向けさせることになった。これが現在の発展した歯周病治療に繋がる。また近年では歯周病などの口腔内細菌は心臓病、糖尿病その他多くの全身疾患と相互に影響し合っている事が確認されている。これは島峯の視野の広さを物語るものであろう。当時、世界の歯科の基礎医学教育と言え、全て口腔解剖学、口腔組織学、口腔病理学など、総て「口腔」の文字がつき、全身的では無く、局所的であった。これを憂えた島峯は大正(1914)年、ロンドンにおける万国歯科医学会で「これからの歯学部の教育は、医学部と同じく、全身の基礎医学を取り入れなければならない」と発表し、聴衆に多大な感銘を与え、その後の歯科教育に大きな影響を与えている。

ドイツに於ける島峯の功績と言え、梅毒菌、スピロヘータ・パリダの純粋分離・純粋培養の成功も挙げなくてはならない。独自の実験方法、実験器具を作り、世界で初めて実験に成功し、欧州中の注目を浴びた。ちなみに野口英世も同じく成功したと言うが、その結果は純粋培養では無く、雑菌が混入していた。

島峯徹をどのように評価しようか。独逸に留学した早々、顎骨の人類学的研究と唾液の生化学的研究をし、それぞれの教授と共著をあらわしている。又第二象牙質の組織学的発見、並びに梅毒菌の純粋分離・培養の細菌学的功績、歯学教育の新しいビジョンの提示、歯科大学の創設、全てが独創的であり、未来的である。島峯を一言でどう評価しようか。その業績の一つ一つは互いに別々の分野であるから、一言で具体的な評価をするのは難しい。よってその評価は抽象化せざるを得ない。其れ故、私は島峯徹を「創造的預言者であり、かつ具体的実現者であった。」と呼びたい。

即ち高度な抽象性と卓越した具現性が一人の人物に同居しているという、言わば奇跡に近い人であり、もっと一言で評価をすれば、並みではあるが、「天才的な人」であった、と私は思っている。

鳥峯は晩年、「自分は、本当は人類学をやりたいかった。」と何度か述懐したと言う。42才の時にアイヌ人の調査を実際に行い、その思いを強く持ったことだろう。67才で生涯を終えたが、もし、もう少し長生きして人類学に打込む事が出来たなら、或いはもう少し早く人類学に専念していたら、人類学的見地から、即ち各論的では無く、総合的見地から、その「創造的預言者」ぶりを発

揮して、もしかすると今のとは全く異なる医学・歯学を提示したかもしれない、などと夢想している。

歴史の世界では「もし」などは許されないという。それならばその「もし」の内容は、次の世代の者に残された課題として生きるだろうか。

(平成26年12月六史学会合同例会)

## 日本で最初に雇用された女性看病人について

日下 修一

### はじめに

従来、1868年（慶応4年）閏4月17日に、横浜軍陣病院に女性の看護人を置いたのを以て、日本初の看護婦とされたが、慶応4年4月24日、栃木県下都賀郡壬生町にある壬生城内であったとされた。それ以降にも、前線病院で女性看病人が存在していた記録はあり、本報告は戊辰戦争の推移の状況から、壬生城内の女性看病人が日本初の看護婦に該当することを論証する。

### 文献研究資料

弘田親厚著『慶応四戊辰 会津征討日記 弐の巻』（原本複写）、以下翻刻、弘田親厚著『慶応四戊辰 東征道の記 壺の巻』、同『慶応四戊辰 会津征討日記 弐の巻』、『京都大政御議定記并関東戦闘日記一ヨリ十七迄』、片岡健吉旧蔵『東征記壺』、『勝沼安塚戦記』、『戊辰従軍戦史名籍』、中央町松本義家文書『慶応四年戊辰年諸御用留帳 通町割元名主 松本庄兵衛』、大山柏『戊辰役戦史（上下）補訂版』、下野新聞平成19年4月1日1頁。

### 結果

#### 1) 宇都宮城（現栃木県宇都宮市）攻防戦前の 戊辰戦争の状況

1867年（慶応3年）慶応3年10月15日大政奉還がなされた。1868年（慶応4年）1月3日から

の鳥羽伏見の戦いで、女性看病人を雇ったという記述はない。また、京都近郊の旧幕府軍や西日本では実質的な抗戦はなく、看病人を雇用する必要がなかった。

1868年（慶応4年）2月7日、旧幕府歩兵2,000名が江戸を脱出し下野方面へ逃走。同3月6日、板垣退助支隊（約1,000名）は柏尾において、近藤勇の甲陽鎮撫隊121名を破った。官軍の負傷者は3名。同3月9日、東山道軍の先遣隊200余名が梁田で脱走兵の旧幕府軍900余名を破った。官軍の戦死者は3名、負傷者は6名で、旧幕府軍戦死者113名。

1868年（慶応4年）3月中旬～下旬、現栃木県南部で農民らによる、打ち壊しが始まり、宇都宮藩領に波及した。同4月5日、鹿沼に押し寄せた一揆勢を宇都宮藩兵が鎮圧。同4月11日江戸城無血開城。大鳥圭介らは旧幕府軍歩兵隊を率いて、下総国府台方面へと脱出。同4月12日に大鳥軍は日光へ向かう。同4月16日小山第一次の戦闘で大鳥軍が新政府軍を破る。同4月17日武井村の戦闘、小山第二次の戦闘、小山第三次の戦闘で大鳥軍は新政府軍を破り、連勝。新政府軍第一次救援隊（土佐・因州など）派遣。同4月18日新政府軍第二次救援隊（長州・薩摩など）江戸を出発。